

# 社会に開かれた教育課程を創るカリキュラム・マネジメント

——「互酬性」に配慮した社会科・総合的な学習の授業づくりを通して——

栗原幸正・大國翔太・浅谷直樹

## A Study of “Curriculum Management” Practices Benefiting the Community

—— Developing Social Studies Lessons with Reciprocity among Students, Citizens, and Governments ——

Yukimasa KURIHARA · Syouta OGUNI · Naoki ASATANI

高崎健康福祉大学紀要 第17号 別刷

2018年3月

# 社会に開かれた教育課程を創るカリキュラム・マネジメント

——「互酬性」に配慮した社会科・総合的な学習の授業づくりを通して——

栗原 幸正・大國 翔太<sup>1)</sup>・浅谷 直樹<sup>1)</sup>

(受理日 2017年9月9日, 受稿日 2017年12月21日)

## A Study of “Curriculum Management” Practices Benefiting the Community

—— Developing Social Studies Lessons with Reciprocity among Students, Citizens, and Governments ——

Yukimasa KURIHARA・Syouta OGUNI<sup>1)</sup>・Naoki ASATANI<sup>1)</sup>

(Received Sept. 9, 2017, Accepted Dec. 21, 2017)

### 1. はじめに

文部科学省は平成29年3月告示の改訂学習指導要領において、「社会に開かれた教育課程」<sup>1)</sup>の創造が重要なポイントであると打ち出したことは周知の事実である。では、「社会に開かれた教育課程」とは一体どのような教育課程なのであろうか。文部科学省初等中等教育局教育課程課長の合田は、持続可能な社会の担い手となる子供たちを育てるために、教育が「社会」をリードしつつ、「社会」と学校が育むべき資質・能力を共有して連携していくことが重要であると押さえた上で、コミュニティ・スクール推進やプログラミング教育の意義を唱えている<sup>2)</sup>。また、「社会に開かれた教育課程」推進のために無藤は「学校長が教職員や地域にわかる説明をする」「アクティブ・ラーニングを導入するための校内体制を造る」「若手教師の育成」等の準備が

管理職や教職員に新たに求められると述べている<sup>3)</sup>。つまり、飛躍的進化を遂げる現代社会の次世代を担う児童たちを育成するために、学校が多角的多面的に今まで以上に広い「社会」と連携・協働して大きなチーム学校を形成し、社会で役立つ資質・能力を、コミュニティ・スクール推進やその道のプロを招いてのプログラミング学習等を活用して育成していく事が目指されているのである。さらに、そのためには学校長やミドルリーダーが中心となって、「社会」に対して説明責任を負うと共に、アクティブ・ラーニングを実践できる教職員の育成を図っていくことが必要とされている。

これを受けて、学校現場ではすでに取り組みが始まっているが、残念ながらその多くは、教育と言う営みの不確実性<sup>4)</sup>を背景とする、教職員の「漠然とした不安」が要因となって、「社会に開かれた教育課程」の具現化の方向性が、矮小化や形骸化、また、マニュアル化する傾向を生み出し始めている<sup>5)</sup>。コミュニティ・スクー

1) 茅ヶ崎市立浜須賀小学校

ルとなることで「社会に開かれた教育課程」が達成できると捉える教育行政や、学校経営のグランドデザインを全市教職員で作成し、それを地域に発信していくマニュアル作りを目的化した校長会も存在する。その他、とにかくプログラミング学習を導入する、タブレット端末を児童に配付する、さらにはカリキュラム・マネジメントやアクティブ・ラーニングに係る教員研修を研修のメインに据えるなど、教育界の反応は早い。

その動向の中で特に筆者が懸念しているのは現状のままの「連携」の量産体制である。これまでの学校教育における「連携」の課題は次章で検証するように多様に存在している。それを吟味することなく教育的意義の薄い連携ありきの「連携」が次々と生み出され、「連携」を消化することが主業務の学校に陥る危険性も否定できない状況が存在しているのである。

そこで、本実践研究においては、これまでの学校と地域や保護者・社会教育等との「連携」のもつ課題に主眼をおき、それを再構築並びに実践する事を通して、児童たちにとってよりよい「社会に開かれた教育課程」を創造していくための、意義ある「連携」の具現化に向けて、何が重要であるかを明確にしていく事を目的とする。そして、現在の教育界の動向の中で見落とされている、教育を受ける児童たち自身が何をどのように学びたいのか、また教職員自身が児童たちに何をどのように学ばせたいかの当事者意識の視点を重視した上で、今後各学校の「社会に開かれた教育課程」創造に向けて、「連携」を組み入れた、どのような授業づくりをしていくべきかを明らかにしていきたいと考える。そして併せて、それらの取り組みを支える、カリキュラム・マネジメントの重要性についても言

及したい。

## 2. 「連携」に係る課題

### (1) 形式化した連携

学校や地域・保護者との連携の重要性について、近年多く語られるようになってきたが、元々学校創設の明治時代から連携は当たり前の様に行われてきた。昭和の時代に入ってもその文化は継承され、筆者が就職した1980年当時は、教職員を育てたのは学校での研修や同僚からの指導と言うよりも、保護者や地域の支援の力が大きかったと言える時代であった<sup>6)</sup>。

しかし、社会の価値観や様相は大きく変革した。それに伴い、「連携」が形式化してきた感が強い。どの連携も「児童たちのため」というスローガンは一致するのだが、学校は、児童たちのために地域や保護者は協力して当たり前という思いがあり、保護者の気持ちの中には「学校の職員がやるべきじゃないの」という思いが存在する。しかし、連携するのが一種の決まりであるから、朝早くから交差点で黄色の旗を教師も保護者も振るのである。

また逆に、地域に学校が協力するのが当たり前であるという形式化も進行している。地域の行事にボランティアと称して大量の児童生徒及び教職員が動員される。そして、地域の方々は今年も盛況であったと喜ぶが、引率する校長や教師、一生懸命働く児童生徒たちは土日を返上して参加し、当然学校は疲弊する。本来児童たちの育成や学校の支援に寄与するための社会教育団体が、結果としてその団体維持のために児童たちや学校を利用するという本末転倒の状況に陥っているケースも多い。しかし、学校は、学校の評判を落とさないために、地域の要望に

応えていくのである。

では、授業面ではどうであろうか。現在、多くの学校が、前年度を踏襲する形でゲスト・ティーチャーとして地域の方々に講師として招き入れている<sup>7)</sup>。突然児童たちの前に現れた地域の方の話をもとに、とにかく体育座りで聞かされるケースも多い。これでは、意義ある教育活動とは言えないが、行政調査等の地域連携実施済みの項目にカウントされ、学校の連携実施に係る経営責任が果たされた事になっていくのである。

果たしてこのような連携を継続・拡充していくことで、「社会に開かれた教育課程」の創造を目指すことができるのであろうか。本当の連携とは、生身の大人と児童が同じ空間・時間で、共に実りある学びや心の充足感、時には利益を共有することを織りこんだものだとすれば、形式化された「連携」から抜け出す新たな連携の模索が必要不可欠であり、その方向性を模索していく必要がある。教育的に意義ある「連携」とはどうあるべきかを問うていかねばならない。

(2) 意義ある「連携」を阻害する学校組織文化  
意義ある「連携」を阻害している要因は学校にも内在している。それは、学校というシステム自身が持つ課題である。

まず、教職員は非常に生真面目である。「社会に開かれた教育課程」を目指す学習指導要領の内容を緻密に実践しようと取り組むのが常である。そして、その学習指導要領の内容自体が改訂ごとに緻密さを増してきている。そのため、各学校の教育活動が学習指導要領に沿った形で細部まで画一化され、連携活動を柔軟に年度途中で組み入れたり、新たな「連携」を生み出す余裕が学校現場に少なくなっている現実がある。

そのことにより、形式化や踏襲化が促進されやすくなるのである。

次に、各校の教育活動の全体計画や指導計画が整備され、学校の教育活動全体の統一性がとれてきたことにより、学校や学年全体で取り組む連携活動が主流とならざるを得ない状況になっている事が課題となっている。そのため、どうしても形式的な連携とならざるを得ないのである。また、近年小学校においても各学級独自に取り組むことに対する忌避傾向<sup>8)</sup>があり、学級単位の児童・保護者・地域が共に作り上げる連携活動を構築することが難しくなっている傾向も存在する。

この状況を乗り越えていくためには、各教師一人一人の地道な努力ではどうしても限界がある。学校の組織や学校文化が要因となる全体的課題でもあるので、学校全体の教育課程の変革を含む、カリキュラム・マネジメント<sup>9)</sup>が意義ある「連携」の確立に向けて不可欠なのである。

### 3. 意義ある「連携」を生み出す授業づくりの方向性とカリキュラム・マネジメント

前節までの状況をうけ、筆者らは、平成28年度から学習指導要領改訂を先取りする形で、勤務校である茅ヶ崎市立浜須賀小学校において、「社会に開かれた教育課程」の創造に向けて、生身の大人と児童が同じ空間・時間で、共に実りある学びや心の充足感、時には利益を共有することを織りこんだ意義ある「連携」を生み出すためにはどうすれば良いか、また、よりよい「連携」を生み出すために学校はどうすれば良いかについて、「授業づくり」を中核に据えて実践研究に着手したのである。その際、「授業づく

り」に向けて検討し、取り組んだ点は以下の通りである。

### (1) 「連携」を取り入れた「授業づくり」の方向性—互酬性への配慮—

平成28年4月から、筆者らは勤務校の総合的な学習の「授業づくり」を実践するにあたり、随所に地域や保護者、行政、民間などとの多様な連携を入れ込み、社会に多様に開かれた授業構成を検討・考慮していった。その際、連携する両者の「互酬性」<sup>10)</sup>の確保を常に入れ込んだのである。前節で述べたように、これまでの連携の多くが、片方が相手を利用してメリット得るというものであり、そのような連携は継続しないか形式化に陥り、一番に考えねばならない児童たちの学びとはなっていない。その状況を払拭するため、どんな短い連携であっても何らかのメリットを感じられる、両者にとってWIN-WINな実践となるよう授業づくりを目指したのである。

そのため、連携を中心にした教育活動を始める際には、学校に支援をしてくれる側のメリットは何があるのかについて常に検討し、連携相手の方々との打ち合わせの際にもその内容を伝えていくことを継続していったのである。

### (2) 授業づくりを支えるカリキュラム・マネジメント

意義ある「連携」への再構築を目指すためには、学校の授業づくりに向けてのカリキュラム・マネジメントの構築が不可欠である。茅ヶ崎市立浜須賀小学校の校長であった筆者は、着任した平成27年度より平成28年度の「授業づくり」を見通して、教職員の理解のもと、次のようなマネジメントを行った。

#### ①校内研究体制の改革

当該校の校内研究はそれまで、教育内容・方

法のスタンダード化を標榜した、全学年・全教室が同様な形式で授業を行っていく方向性を持っていた。そのため、教科書を中心とした授業が中心となり、学年斉一な授業が求められ、どこまで斉一に児童たちが学ぶ形式を習得したかという、児童の授業の受け方の定着が目標とされてきたのである。7年間にわたり、授業の内容や質は問われる事がなかったため、教師たちは自分で児童たちと共に授業を創る喜びを感じず、また各学級の実情に沿った独自の授業づくりをしなくてはならないことを忘れてしまったようであった。

そこで、校内研究の改革を断行し、授業研究を中心に据えた学びの質を高めるための校内研究への変革を目指したのである。そして、「学年斉一取り組み主義」の枠を外して各学級で授業づくりに取り組むことを可能とし、その理解を保護者・地域に図っていったのである。

当初、教職員や保護者等からの反発やクレームを懸念したが、今回示す実践に見えるような児童たちの真剣な学びや笑顔を前にして表出してきたのは、教師たちのどう授業づくりをしたらいいかという不安の声であった。その不安は、新たな教育課程を創造できるという予感を感じるものであった。そしてその前向きな不安に対応する形で、管理職や同僚が応えていく教師文化が新たに形成されていったのである。

#### ②学校経営グランド・デザインの明文化及び可視化

教職員に全体像や方向性を周知するために学校経営グランド・デザインを新たに作成し、それを図式して配付し、学校経営の重点目標に「授業づくり」をしっかりと位置づけたことを明示した。これにより、教職員が何をどのようにしていくかの方向性がわかりやすくなった。



### ③特別支援教育体制の整備

教師が安心して授業づくりに取り組めるように、校内の特別支援教育システムを構築し、児童たちや保護者の状況を教師が把握すると共に、児童や保護者に適切な対応ができるように特別支援教育コーディネーターを中核とした支援体制を再構築したのである。この効果も影響してか、「社会に開かれた教育課程」の創造を目指して総合的な学習を中核に授業づくりに取り組んだ学級の児童や保護者からは、クレームや不満を聴くことはほとんどなかった。

### ④教職員のモチベーション向上

授業づくりに取り組む教職員のモチベーションを上げるため、サービスの規程を最大限利用して、教材研究等の時間を確保したり、ノー残業日を設定して地域や保護者に周知していくなど、教職員の負担を軽減していく方策も取り入れていった。一見授業づくりと関連がないように思われがちだが、教職員のサービス等のマネジメントは、教育活動全体に大きく影響したのである。

### ⑤教育課程の柔軟化

意義ある「連携」を生み出すためには、授業の進捗状況や児童たちの実情に合わせて、指導計画や授業時数の柔軟な運用が不可欠である。そのため、教育課程の運用に幅を持たせ、年度内の変更や新たな取り組みの組み込みに向けて学校全体が動く体制を生みだした。このことにより、教師達は児童たちに寄り添った授業づくりを実践しようとする意識を持ち始めてくれたのである。

以上のようなカリキュラム・マネジメントは、研究主任・教務主任・特別支援コーディネーターを務めるミドルリーダー達が、自らの授業づくりを効果的かつ意義あるものにするために、積極的に動いてくれたことと併せて、勤務校の

教職員がこの方向性に歩調を合わせてくれた賜である。それなしには、本研究実践は成り立たなかったと考えている。そして、その成果として次節で示すような実践が生み出されたのである。

## 4. 生み出された授業単元

### (1) 第5学年総合的な学習「茅ヶ崎駅弁物語」

本実践は平成28年4月から平成29年2月にかけて、茅ヶ崎市立浜須賀小学校の大國翔太教諭が担任する5年4組（児童数37名）で行った社会科を中核とする総合的な学習である。

#### ①教師の思い

本実践を生み出した大國教諭はこの授業を通して、次のような力を児童たちにつけていきたいと考えて授業づくりをスタートしている。

- A. 日常生活や社会との関わりのなかから、自己の課題を見つける力
- B. 課題に対して見通しを持ち、解決方法を考える力
- C. 課題を解決するために必要な情報を収集する力
- D. 学びに向かう姿や、探求的な学びを振り返り、新たな課題を見つける力
- E. プレゼンテーションする力
- F. 学ぶことを楽しむ力

そして、授業全体を「○○○したい」と主体的に児童たちから声があがるような授業にすること、授業の最後に「やってよかった」、「やり遂げた」というような達成感を児童たちが味わえる授業にすることを目指したのである。

そのために大國教諭は、いかに児童たちにとって真剣に考えられるような課題を設定できるかということ、児童たち一人一人の目標を明

確にしていくことを目標に研究主任と相談を重ねていったのである。

### ②児童たちの実態と授業の方向性

大國教諭は総合的な学習で何を学びたいか児童たちと話し合う中で、児童たちの中には、茅ヶ崎市に生活しているが、茅ヶ崎市について知らない児童や、あまり興味関心を持っていない児童が多い事に気づいた。そこで、児童たちも興味を持ちやすい「食」を入り口として、茅ヶ崎について知り、愛着を持ち、茅ヶ崎市が魅力的な街であることに気づかせる事はできないかと授業を構想する事にしたのである。たまたま、茅ヶ崎市に「道の駅」が数年後に開設されることになっており、地域の特産品や歴史、伝統が見つかった駅弁や食堂メニューに焦点を当て授業する事で、児童たちが茅ヶ崎市を知る事ができる上に、多様な「連携」の構築も期待できるのではないかと構想し、授業づくりはスタートしている。

### ③実践の内容

#### (ア) 駅弁調べ

児童たちの興味関心を惹きつけるため、駅弁を最初に扱うことにし、高崎のだるま弁当を使い学習を4月に開始した。だるま弁当製造会社の社長のご厚意で、全員にだるま弁当の容器等が贈られた事もあり、児童たちは精力的にだるま弁当について調べ、駅弁には地域食材や地形・気候、特産品、そして歴史がつまっていることを学んだのである。ここでは互酬性に配慮し、会社の社長に礼状を出したが、児童たちが旅行に行ったら必ずだるま弁当を買おうと手紙で伝えたことが社員の方々にも最高のお返しだったようである。

5月に入り駅弁には地域の特色が関係していることを知った児童たちを、大國教諭は全国の

駅弁の調査に誘った。一人一つの駅弁を、その駅弁について商品名、駅弁の中身、パッケージの工夫、他の駅弁とは違う魅力について調べさせたのである。駅弁を販売している会社に直接手紙を書き、資料や容器を送付してもらっている。駅弁会社から返事や資料をもらった児童たちは目を輝かせて「すごい。本当に届いた」と大喜びの様子だった。中には駅弁会社の社長自らが、駅弁に対する思いを直筆でしたためて送付してくれたケースもあり、児童たちだけでなく、大國教諭自身も感動せざるを得なかったとのことである。

右の写真は、真剣に弁当調査の結果を報告するためにポスターを作成している様子である。児童たちは、報告をきく人が、美味しそう、買いたいという気



持ちになるように、ききやすさや間の取り方を工夫し、ボディー・ランゲージを駆使して発表に臨んでいる。これは「連携」に快く応じてくれた全国の駅弁屋の効果以外の何物でもない。児童たちが本気になり始めたのである。本物の威力は絶大である。

#### (イ) 道の駅販売の駅弁を創ろう

全国の駅弁調べを通して本気になってきた児童たちに「道の駅販売の駅弁を本当に作ってみない？」と大國教諭は投げかけた。ここで児童たちの目の色がガラッと変わり、教員自身も鳥肌が立ったそうである。それまでは、授業に対して受け身であった姿が主体的な姿へと変わっ

た瞬間と言えよう。

しかし、児童たちはどんな食材をいれるのか自分たちで考えることになったとたん、「しらす」、「わかめ」、「ちがさき牛」くらいしか思いつけない事に気づいた。大國教諭が目指した通り、児童たちは主体的に茅ヶ崎を学ばなくてはならない状況となったのである。これが本格的な「連携」の始まりである。大國教諭の読み通り、インターネットや保護者への調査では十分な内容が調べられなかった児童たちは、市役所に教えてもらいに行くという結論となった。そして、交渉した結果、茅ヶ崎市役所農業水産課の方々に出前授業をしてもらうことになるのだが、実際には、大國教諭はこの連携については事前に準備しており、農業水産課も地産地消のアピールをする場を探していたこともあり、「互酬性」確立の上での連携が始まったのである。

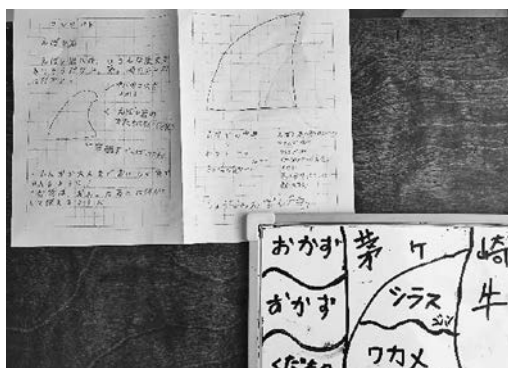
(ウ) 茅ヶ崎市農業推進課による出前授業

畜産、野菜、果樹、漁業、花など茅ヶ崎市ではどんなものがどれだけ生産されているのかを農業推進課の方々には教えてくれた。当然児童たちは目から鱗であった。駅弁を考えていく上でどのような食材をどのように使えば、茅ヶ崎市の魅力が伝わるのかについて、児童たちの中で見えてきた様であった。



また、このあと、児童たちは学校の栄養士に

インタビューをし、下の写真が示すように駅弁（お弁当）づくりの基本を教えてもらっている。



出前授業で得た知識や、栄養士からのアドバイスをもとに、児童たちは茅ヶ崎市の魅力が詰まった駅弁をメニュー、食材、テーマという観点でグループに分かれ考えていった。前回考えた時とは違い、特産物について知識を得た児童たちの話し合いはとても活発に行われ「茅ヶ崎の駅弁メニュー」（理想）が完成したのである。

資料〈児童たちの考えた理想メニュー〉

- 5年4組オリジナルお弁当メニュー
- ・ごはんチーム……しらすごはん
  - ・おかず(メイン)チーム……茅ヶ崎牛カツ
  - ・おかずAチーム……人参と里芋の煮物
  - ・おかずBチーム……帆立しょう油バター
  - ・おかずCチーム……しらすコロッケ
  - ・商品名チーム……㊦がさきの ㊧つつり  
㊨っぱり ㊩に入り弁当

(エ) 濱田屋による出前授業

完成した弁当メニューを実際にお店で販売している人たちに見てもらいたいという意見が児童たちから出てきたので、茅ヶ崎の老舗お弁当屋である濱田屋に授業の協力を依頼した。もちろん濱田屋にとっては後ほど大きな宣伝となり、このことがもとで大きなケータリングの依頼が



あったり、テレビで屋号が放映され続けるなど、互酬性は確立できる読みがあった。

ただ、濱田屋の話は児童たちにとって歓迎できるものでは決してなかった。褒められ認められると思っていた児童たちにとって、現実には厳しいものとなった。

#### 資料〈理想メニューへの濱田屋の指摘〉

- ・いくらぐらいの予算で考えているのか。3000円程度で販売するなら可能だが、あまり現実的でない。売価率、原価率を考える必要がある。
- ・品数が多すぎる。
- ・基本的に生もの(しらす)は衛生上使えない。火を通すなどの調理が必要。



メニューを再検討する必要性を感じた児童たちは次の項目について話し合いを再開する。もう笑いは教室内にはなかった。

- a. 駅弁のテーマはどうするのか
- b. ターゲットはどれぐらいの年齢層なのか
- c. 販売期間どのくらいか
- d. 販売価格はどうするか
- e. 原価をいくらで考えるのか
- f. 色合いはどうか
- g. 味付けはどうするのか

これらの内容を話し合い、駅弁のイメージをクラス全体で1つのものにしていった。

「茅ヶ崎を代表する海」、「小さい子からおじいちゃん、おばあちゃんまで幅広いお客さんを楽しんでもらえる駅弁」、「夏休みの期間限定」、「1000円前後、原価は350円ぐらい」、「五色(白、黒、黄、赤、緑)がはいる」、「塩味、甘味、苦味、酸味を大切にする」が児童の考えたコンセプトである。

そして、決定版メニューが完成した。

ちがさきの

㊦つつり ㊧っぱり ㊨に入り 弁当

- ・わかめごはん
- ・アジフライ
- ・人参と里芋の煮物
- ・海藻サラダ

(オ) 本当にできたお弁当

メニューが完成した頃、新たな「連携」が飛び込んできた。保護者の知人がお弁当のケータリングや給食を作っている会社に勤めており、協力してくれる事となった。販売交渉は困難であったが理想に近いお弁当を実際に作ってくれることとなった。



3月末の学年末に、児童たちの考えたお弁当が形となって教室に届けられた。「連携」した方々も教室に招待され、児童たちも大興奮する中、お弁当の蓋を開けたときの歓声はものすごく、「連携」した方々の笑顔も絶えることがな

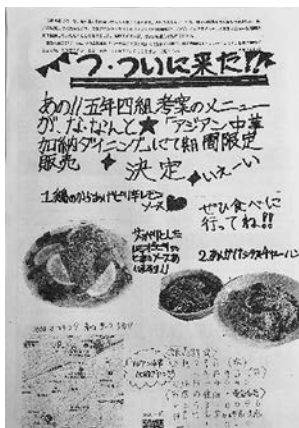
かった。「互酬性」が生んだ歓声と笑顔である。この様子は地域テレビで一ヶ月にわたって放映されている。前頁が一見普通な、「連携」と児童たちの思い満載のお弁当である。

(カ) 「連携」の連鎖と新たな活動

『しらす』は、お弁当には不向きと言うことで駅弁のメニューからは外されおり、児童たちは納得いかなかった。それを知ったアジア中華加納ダイニングが、通常メニューは難しいが、お店でアレンジを加えて「あんかけしらすチャーハン」(下写真)として期間限定で販売することになった。児童たちはもちろん喜ぶと同時に、この「連携」にどう応えるかを自ら考え実行に移したのである。



児童たちは、より多くの人たちに、自分たちの考えたメニューを食べてもらうため、お店の



PR 活動することを構想した。

PRの方法についてはすでに濱田屋の出前授業で学習していたので、ポスターの作成・掲示、チラシの作成・学区内の回覧板で回してもらう、

学区内のお宅にポスティング、保護者の方のSNS(ブログ、フェイスブック、ライン等)を用いて、大宣伝作戦を実施したのである。そしてその活動は市役所農業水産課に伝わり、茅ヶ崎市が進める地産地消のすばらしいモデルになると言うことで、市の広報番組「ハーモニアス茅ヶ崎」や市役所のフェイスブックで駅弁の授業の様子と児童とお店のコラボメニューの宣伝をとりあげてもらうことができたのである。当然、関わっていただいた事業者や市役所の方にとっても大きなメリットがある展開となったことは言うまでもない。テレビやインターネットにおよそ一ヶ月事業所名が1日3回出続けることとなった。

(キ) 学習のまとめ

駅弁の授業を振り返り報告会を開催した。児童たちは授業の内容を十分把握し、自分がどう関わったか、また、「連携」してくれた方々の知恵も十分認識しており、何を学んだか、どこが重要だったかを、わかりやすく、自信を持って発表することができており、教師の思いを十分満足させるものとなった。

児童たちからは、次のような授業の感想が出されている。

A子：茅ヶ崎に住んで11年になるけど、知らなかったことがたくさんありました。この地域でこんな食材が作られているんだなど発見や気づきがたくさんありました。茅ヶ崎の魅力が分かり、茅ヶ崎がもっと好きになりました。駅弁の学習をして良かったです。

B夫：商品になるまでこんなに考えることがたくさんあるなんて思わなかったです。大変でした。でも、友達と真剣に意見を出し合い、駅弁が完成したときとてもうれし

かったです。来年も今回のような楽しい学習をしたいです。

C江：一つの商品（駅弁）を作るには企画からPRまで細かなところまで考えていかないといけないということを学んだ。普段、スーパーで売っているような商品も見た目、味、パッケージ、ポップなど商品販売に関わっているすべての人の思いが込められているのだろうと思いました。

#### ④実践の考察

まず児童たちが主体的に取り組む総合的な学習にする事ができたかという点に関しては、自分たちで考えた駅弁を作ることになり、児童たちの目の色が変わったところから授業が大きく目標に近づいたことがわかる。そして、本物に関わる様々な方々と連携できたことにより、それはますます加速していったと感じている。

また、50時間という授業時間のために、中だるみしてしまう場面があったが、「連携」がその軌道修正に大いに貢献した。切実感のある連携は、授業づくりには欠かせない。

次に達成感を児童たちが味わえることができたかという点に関しては、児童たちの授業後の感想から推し量ることができ、想定以上に児童たちが達成感を共有してくれたことを読み取る事ができる。これについても「連携」の影響は大きい。

#### ⑤実践を終えて（大國教諭の感想）

当初は理想の駅弁を考え、そのメニューを実際に作って食すことをゴールとしていた。しかし、学習を進めていく中で商品開発という少し高いハードルを設定し学習に取り組むこととなったことで、保護者や地域、お店の協力のもと、理想の駅弁を作ったり、お店とのコラボメニューまで作るまで授業が発展したことは至極

の喜びである。さらに商品化し、弁当販売までは至らなかったが、社会（お店や地域、市役所など）に情報を発信したり、受信することができた事も想定以上の成果である。

また、お店や地域、市役所の方々も快く協力してもらい、「来年もやりましょう」や「困ったことがあったら協力しますよ」など連携が大人にとっても楽しいと伝わる温かい言葉を頂戴したことが印象的であった。

今回の駅弁づくりの授業を通して、学校と地域との連携にはやはりWIN-WINの関係が重要だということを学ばせてもらった。今回児童たちが授業で本気なり真剣になることで、地域やお店、市役所などがより一層連携を深めてくれたように感じている。それは双方にとってメリットが共有できたからに他ならないであろう。児童たちにとっては自分たちが考えたものが具現化され、想いを形にすることができた。地域（自治会や保護者）は児童たちが広告や宣伝活動をすることで活性化された。店側にとっては、店の名前がテレビ放送され、宣伝になりお客さんも増加したという。市役所側としては、小学校と協力したという実績をテレビやフェイスブックで市民に発信することができたのである。

このように双方にとって意義ある「連携」は、児童たちが本気になり学習の目標がはっきりすることに貢献し、学校と社会が同じ方向をむいて「社会に開かれた教育課程」の一つのパーツを作り上げていくことができると考える。次の目標は「社会に開かれた教育課程」というジグソーパズルのもう一つのパーツを児童たちと教師と地域・保護者と一緒に創りだして行くことである。

## (2) 第3学年総合的な学習

### 「茅ヶ崎の魅力をみつけよう」

本実践は茅ヶ崎市立浜須賀小学校の浅谷直樹教諭が平成28年4月から平成29年3月にかけて、担当する3年4組（児童数36名）の児童と取り組んだ総合的な学習である。

#### ①教師の思い

浅谷直樹教諭は、日頃より総合的な学習の授業を通して児童たちと社会をつなげていくことを心がけており、児童たちにもそのことを伝えている。しかし、相手が小学3年生ということもあるので、「社会」という言葉を用いず、3つの言葉に分けて説明している。それは「ヒト、コト、モノ」の3つである。

ヒト… 保護者、地域の方々、  
施設・工場・店舗で働く方  
関わるコト、モノの関係者  
コト… 学校行事、地域行事、イベント  
モノ… 施設、工場、店舗、公園、製品、食品

児童たちには、ヒト、コト、モノと関わりあう中で、次のような6つの力を培ってもらいたいというのが浅谷教諭の思いであった。

- ・日常生活や社会との関わりの中から自らの課題を見つける力
- ・課題に対して見通しを持ち、解決方法を考える力
- ・課題を解決するために必要な情報を収集する力
- ・学びに向かう姿や、探究的な学びを振り返り、新たな課題を見つける力
- ・自らの行為について意思決定する力
- ・相手や目的に応じて、分かりやすくまとめ、表現する力

#### ②授業の目標

- 行事をこなす総合的な学習にならないように年間かけて学習を進めていく。
- 児童たちが主体となり、ヒト、コト、モノを巻き込んでいけるような活動をする。
- 年間の活動を終え、関係者それぞれが「やってよかった」と思える活動にする。

浅谷教諭は、前述の教育への思いを、上記の3つの年間の総合的な学習の目標に組み込み、総合的な学習を学級経営の軸に据えたのである。児童たちの実態を見据えながら興味のあるものや学習に膨らみを持たせられるものを見つけて授業を進め、授業を通して充実した学級経営を目指したのである。

総合的な学習は周知のとおり、他の教科と関連づけて学習を設定することができるので柔軟性に富んでいる。一方、柔軟性が高いからこそ教師側で児童たちの実態をしっかりと捉え、そのうえで計画をしていかないと、総合的な学習の時数の大部分を学校行事の準備に使ったり、学年集会に使ったりすることに陥ってしまう可能性も高い。

そのため浅谷教諭は40時間以上の大単元計画をたて、年間を見通して学習していけるような取り組みを、ヒト、コト、モノとの「互酬性」に考慮した「連携」を多様に組み入れて組織し、児童たちに、自分たちの目や手、足で地域に実際に触れていくなかで、学区や茅ヶ崎市について興味や愛着を持たせ、また、学習の最後に「総合的な学習をやってよかった」と言う大きな充実感・達成感を得ることができるような「授業づくり」に取り組んだのである。

#### ③実践の内容

##### (ア) 学区探検

まず4月に、3年生の社会科でどの学校でも



実践されている学区探検に、学年全体で4回に分けて取り組んだ。通学路を中心とした道路を歩き、周辺施設や道路の名称、ランドマークなどを児童たちと確認している。浅谷級では、この活動で気づいたことを次の学習活動の軸としていくため、探検に行く前に、『まちの中ヒト、コト、モノについての「気づき(!)」や「不思議に思ったこと(?)」を見つけよう』という視点を児童たちに与えている。



学区探検では、児童たちが本当に多様なヒト、コト、モノに注目している。学区探検後の振り返りでは、「いろんな種類の標識があった」「なんで真っ直ぐの道とグニャグニャの道があるの?」「公民館って何をするとところ?」や「お店がたくさんある道路とお店が全くない道路があるのはなんで?」「車がたくさん走る道路と人がたくさん通る道路があった」「なんで道路に名前がついてるの?」などの意見が次々として出てきている。そこで、意見をまとめていくと、道路に関する疑問が多かったので、道路についてもう少し探究していくことになり、学区に通っている4本の大きな道路の違いについて交通量から調べていくことにしたのである。

#### (イ) 学区道路の交通量調査

クラスを8つの調査グループ(4本の道路それぞれの上下線=計8車線に対応)に分け、同じ時間にどんな種類の車がどれだけ通ったのかを調べることにした。この時、調査場所が学区

全域に広がったため、グループの安全を確保する引率者として保護者に「連携」を要請した。今回は4人の保護者が参加し、どのグループも無事に活動を済ませることができただけでなく、観測地点までに行く道中にグループの児童たちにたくさん話をしてくれたことにより、町の様子に関しての多くの知識を児童たちは得る事ができたようである。参加した保護者も児童たちの学ぶ姿を見て一種の感動を覚えたようで、その後も協力することとなった。

調査後、調査結果について保護者を交えて話し合いを行ったところ、「何車線もある大きな国道は車の交通量が多く、人の交通は少ない」や「人がたくさん通る道路は大きな車はあまり通らない」という道路についての多様な意見が出てきたが、児童たちはその中でも特にバスに興味を持ったのである。

学区には、確かに2種類のバスが走っている。交通量の差の調査から、2種類のバス(路線バス、コミュニティバス)について興味関心の方向性が変化していった背景には、やはり調査に同行してくれた保護者から得た知識の賜という印象が強い。ここから児童たちはより主体的にバスについて探究していくことになったのである。

#### (ウ) 2つのバス比べ

茅ヶ崎市には大きく分けて2種類のバスが通っている。神奈川中央交通が運営している路線バス(神奈中バス)と、市の都市政策課が運営しているコミュニティバスえぼし号(コミュニティバス)である。茅ヶ崎の交通網を網羅するために、まず、神奈中バスが主な道路を走り、それでもどうしても十分でない地区や道路にコミュニティバスが通ることで、市全域をカバーしている。

浜須賀小学区はどちらのバスも通っている地



域のため、児童たちは2種類のバスの存在をもとから知っているが、その存在理由は理解しているわけではなかった。そこで、2種類のバスの働きを通して、市役所の役割や、バスを利用している人々も思い等を学んでほしいと、いよいよ本格的な「連携」を編み込んだ「授業づくり」がスタートするのである。

#### 1) 都市政策課、神奈川中央交通との連携

児童たちと話し合った結果、バスの形状、乗客数、客層、便数、バス停、ルート、などあらゆる面から2種類のバスについて調べていくことになった。浅谷教諭は、交通量調べを経験したことにより「疑問を持つ」→「解決方法を考える」→「調べる」→「疑問を持つ」→…という一連の学びの流れが児童たちに定着してきたことをこのとき実感している。これまでは漠然と調べてなんとなく気づいたことを言い合う感じだったが、今回は2つのバスを比べるために、管理元を調べたり、運行ルートと運賃と関係性に注目して自分なりの予想を立てたりなど、頼もしい姿が見られだしたとのことである。やはり本物の持つアリティは、児童たちを本気にさせていくようである。

実際に調査活動が始まると、児童たちは探究を深めていき、「バス停で待っていたお客さんにインタビューしてきたよ」「実際にバスにのって何人乗れるか数えてきた」など、どんどん活動の幅を広げていった。気づけば教師側が準備した資料では足りず、「本物のバスに乗って調べたい」「実際に市役所に行って話を聞いてみたい」という声が出始めてきた。

そこで、児童たちの学びをより深めるべく、浅谷教諭は神奈川中央交通と市役所都市政策課に「連携」を申し入れ、知恵を借りたのである。この時点では、児童たちの探究活動に沿う形で

「連携」が開始されており「互酬性」への配慮まで手が回らなかったのが実状である。しかし、カリキュラム・マネジメントの効果が出始めており、浅谷学級が外部と連携していくことに学校として寄り添える体制が確立していた。そして、神奈川中央交通の協力を取り付け、都市政策課は教室で出前授業をしてくれることとなったのである。

#### 2) 都市政策課の出前授業

都市政策課が教室に来て出前授業を行った。内容は以下の3つであった。

- a. 児童たちが考えた「2つのバスの役割の違い」についての児童たちからの報告
- b. 路線バスとコミュニティバスの歴史と現状
- c. 都市政策課の目指す目標

aについては、これまでの授業で児童たちは自分たちで予想を立てていたのだから、それを都市政策課の方に伝えることから出前授業は開始された。

#### 資料〈児童たちのたてた予想：平成28年11月〉

- ・東西に移動したい人は路線バス、南北に移動したい人はコミュニティバス
- ・茅ヶ崎駅や辻堂駅が行き先なのが路線バスで、観光地をまわるのがコミュニティバス
- ・太い道に行くのが路線バスで、細い道に行くのがコミュニティバス

その後、2種類のバスの話を伺い、どのような想いで運営しているか、どのような利点があり、どのような課題があるのかなど話を聞いた。児童たちは話を真剣に聞き、バスの目的の違いや、バスが茅ヶ崎市に欠かせないものであること、働くことの大変さなどを学習した。児



児童たちが一番興味を持っていたことは、コミュニティバスの利用者が少なく、もっとみんなに利用してもらえる方法を考えているという点だった。ここから、児童たちの手で「互酬性」を意識した授業づくりが開始されていく。

(エ) これからどうしていくか

2つのバスについて話を聞き、児童たちの中にあった疑問は払拭されたことを一つの契機として、浅谷教諭は少し立ち止まって、今後の総合について話し合う機会を持つことにした。

児童たちは4月からの活動のなかで「学区探険」→「交通量調査」→「2つのバス比べ」という活動を段階的に続けてきた。このような順序で学習を進めてきた背景には、児童たちの疑問を尊重することを継続し続けたということがある。疑問に対して、調査して解決し、また生まれる疑問について、新たに調査をして解決していく。そうすることでまた新たな疑問が生まれるという学びのサイクルを回してきたのである。

しかし、現場の方々の話を聞いたことで、学習活動がいったん収束してしまった印象を浅谷教諭は感じていた。そのため、新たな疑問がなかなか挙がらなくなってしまったのである。そこで、今後どのような活動を続けていくかを全員で再度話し合うことにしたのである。そして、これまでの総合的な学習で学んできたことや自分たちのまわりのヒト、コト、モノについてな

ど、児童たちがたくさん話をしてくれた。そのような話し合い中で、ある児童から「ぼくたちがバスのためにできることはないのかな?」という意見が出た。すると、児童たちは「助けたい」「力になりたい」と次々と意見を言うようになり、いつしか話し合いのテーマは「どうすればコミュニティバスの利用が増えるか」という話題に変換していたのである。まさに「互酬性」の確立に向け児童たちが自ら足を踏み出した瞬間である。

そして、話し合いが盛り上がりを見せるなかで、満場一致で「まずは自分たちがバスを使ってみてバスの良さや茅ヶ崎の良さをしりたい」という意見にまとまった。こうして次の活動は茅ヶ崎の素敵なヒト、コト、モノを見つけてくる「バスに乗ってまちたんけん」になった。

(オ) バスに乗ってまちたんけん

1) 「バスに乗ってまちたんけん」事前準備

「バスに乗ってまちたんけん」を始めるにあたって、グループの引率の協力を再び保護者をお願いすることにした。すぐに6名の保護者の方が名乗り出てくれ、「連携」が意義あるものになりつつある予感が感じられたそうである。

2) 「バスに乗ってまちたんけん」

浜須賀小学校をスタート地点として、それぞれのグループが計画をもとに、「バスに乗ってまちたんけん」に出発した。海に行って、サーファーにインタビューをするグループや、公園に行き、どのような人たちが利用しているのかを調べてみたり、商店街を歩いておすすめのメニューを探したり、神社を訪問して歴史について話を聞いたりするグループなど、活動はそれぞれのグループで異なっていたが、バスに乗ることは共通項目であった。行く先々で、茅ヶ崎のヒト、コト、モノの魅力を児童たちが感じて



くれていた。

実際にバスに乗って、茅ヶ崎を探検することで、地図では感じ取れなかった実際の距離だったり、道の幅や交通量の違い、店舗の方やバスの乗客、施設の使用者などの温かさだったり、教室の中では得ることのできなかったものをたくさん得て帰ってきたようであった。

「バスに乗ってまちたんけん」後に教室でみつけたもの発表会を行ったのだが、どれだけ時間があっても足りないくらいそれぞれのグループが紹介することができている。見つけてきたものを一生懸命に相手に紹介する様子は活動の充実ぶりを裏付けるものであった。

(カ) 新聞を作って発表したい

1) 新聞を掲示する場が欲しい

「バスに乗ってまちたんけん」を終え、「どうすればコミュニティバスの利用者が増えるか」という当初の目的に話を戻したところ、すでに児童たちの中で答えは決まっていたようである。「見てきたものを新聞にして発表会を開き、できればバスの中でも紹介して、バスの魅力をみんなに知ってもらおう」ということだった。東京メトロの宣伝のバス版を自ら考え出したのである。これまでは、まわりにあるヒト、コト、モノと関わりながら行動をしてきた児童たちが自分たちでコトを作り始めようとしはじめてい

るのである。そこで浅谷教諭は新たな活動として「茅ヶ崎の魅力を見つけようプロジェクト」と称して、まちたんけんで見つけてきた様々な魅力を、なるべく多くの人に見てもらえるようにヒト、コト、モノとつながる戦術を児童たちと練ったのである。そこで新たな「連携」の蓋が開くことになる。

浅谷教諭は市役所都市政策課と連絡を取り、児童たちの活動の経緯を伝え、相談したところ、児童たちが作った茅ヶ崎の魅力が載った新聞をコミュニティバス内に掲示することになったのである。児童の気持ちと、都市政策課の目的が合致し、「互酬性」の高いバス内掲示への取り組みとなったのである。

2) 茅ヶ崎の魅力を見つけようプロジェクト

新聞を作って掲示する事が決まり、児童たちはにわかに活気づいたことは言うまでもない。児童たちはどのような記事にするべきか、どのようなレイアウトにするべきかの学習を済ませ、新聞づくりに励んだ。茅ヶ崎の魅力とは何なのかを今一度振り返った児童がいたり、中には休日に家族で再度現場に足を運んで、再取材をするなどして新聞はどんどん出来上がって行ったのである。

新聞が完成目になった頃、まずは「連携」してくれた保護者に見てもらおうことで、新聞の質を高めたいと考え、「車内掲示お披露目会」と銘打ち、新聞について、いい点や改善したほうがいい点などのアドバイスをもらう時間を設けた。タイミングを授業参観にあてたこともあり、多くの保護者に来ていただき、児童たちは自分の新聞を紹介した。すると、意義ある「連携」となったためか、集まった保護者たちは、これまでのように発表に笑顔で拍手するのではなく、発表した新聞ではうまく内容が伝わってこない

という厳しいアドバイスを児童たちに伝えたのである。そのため、児童たちはもう一度、車内に掲示するための新聞を作り直すことになった。



ここでの児童たちの反応は意外であった。何時間もかけてつくった新聞の課題点を指摘され、意欲をなくす児童がたくさん出ると浅谷教諭は予想し、目の前が暗くなったそうだが、意欲を高めた児童の方が多くみられ、どのように書き換えていけばよりよい新聞ができるかを考えたり、いろいろな人にインタビューをしたりして、新聞の質の向上に真剣に取り組み始めたのである。その後、自発的に休み時間を使ったり、朝自習の時間をつかったりして、新聞が完成した。そして、コミュニティバスに掲示された新聞は、茅ヶ崎市内を回り、茅ヶ崎市全体に茅ヶ崎の魅力を広報し続けたのである。



#### (キ) 学習のまとめ

下記に一部を抜粋し掲載するものが、児童たちに学習の振り返りを書いてもらったものである。そこに示されたものは、児童たちがヒト、コト、モノについて十分考えてくれていたこと。また、課題解決型の学習を続ける中で、その解決の手段としてさまざまな形でヒト、コト、モノが関わってきたことに面白さや楽しさを持ってくれたことである。

- ・さいしょは学校のまわりのことだったけど、ちがさき全部のことまで広がって楽しかった。
- ・道ろのことからちがさきのが見えてきてびっくりしたしおもしろかった。
- ・国語とか社会とかいろんな勉強がバスのことで、だから「そう合」っていう名前なんだとわかった。
- ・えぼし号に新聞がはってもらえてうれしい。たくさんの人がバスに乗ってくれるといいなと思う。
- ・ちがさき市のことがたくさん知れた。他の市はどうなってるのかな？
- ・たくさん、み力を見つけられてうれしかった。ちがさきのみ力はちがさきに住んでいる人だと思う。
- ・市役所の人やお母さんたちと勉強できて楽しかった。教室だけじゃなくて学校の外で勉強できてうれしかった。そう合がすきになった。
- ・ちがさきに住んでいるけど知らないことがたくさんあってびっくりした。いろんなことを知れてよかった。

そして、学習を通して関わってくれたすべての方々に感謝している意見が見られたことは、



意義ある「連携」を生み出す事ができた証と考えられるであろう。

#### ④実践を終えて（浅谷教諭の感想）

1年間をかけて60時間の単元として「授業づくり」をすることとなったが、国語、算数、社会科の授業とつながりを持たせて総合的な学習として位置づけたことで、時数について無理を感じることもなかった。これは、授業の進度と時数の具合を小まめに調整して、柔軟に授業づくりができるための学校全体のカリキュラム・マネジメントが効果的に稼働しているからこそ、実施できたと思う。

また、単元を通して、課題解決型の学習スタイルを貫いたことで、児童たちの中に、自分たちで疑問を持ち、その疑問について探求していくという形が根付いたように感じている。探求していく際に、自分たちでまず調べ、その中で必要なことがあればどんどんヒト、コト、モノに関わっていくということを指導し続けた結果、本当に4月には予想しなかったほど多くのヒト、コト、モノとの「連携」を児童たち自身が形成し、一緒に授業を作っていくことができたと感じている。

さらに、何よりも児童たちの周りに、快く学習を支える環境が実はあふれていること、そしてその教育環境を支える方々にとっても本実践が大きな影響を与えている事に気づくことができたことは、私にとっての大きな収穫である。

今回、私が取り組みをしていて一番嬉しかったことは、児童たちの学習に協力した方々から「協力してくれてありがとうございます」「児童たちと一緒に授業に参加できてうれしかったです」「また、ぜひよろしくお願いします」などのお礼の言葉をもらったことである。さらに話を聞くと、「児童たちの目線になって考えてみる

と新しいことに気づくことができた」「一緒に関わっていくことで、児童たちがどのように学習に向き合っているのか知ることができた」「最初はお手伝いのつもりだったが、自分のほうが楽しくなり、もっともっと児童たちと関わりたいと思った」「児童たちのキラキラした目や言葉に元気をもらえてよかった」「また、何か機会があれば声をかけていただきたい」などの意見をいただいた。はじめは児童たちの学習のためにヒト、コト、モノを活用しようと思っていたのだが、そうではなくて、お互いを支えあうことができたのだと感じることができた。まさに結果としての「互酬性」の確立ではないだろうか。

そして、児童たちの感想を読むと、総合的な学習の授業を通して満足感・達成感を持つことができた児童が多くみられた。意義ある「連携」の目標は、やはり児童たちの満足感・達成感を生み出すためにあるのではないかと思った次第である。

## 6. 考察

2つの実践に共通するのは、どちらも学習単元に地域を織り込んであることと、保護者をはじめとする多様な連携を自ら生み出しているところである。

「社会に開かれた教育課程」を創造するためには、地域の教材を開発して行くことが当然求められるであろう。しかし、児童たちにとって地域はすでに知ったつもりになっていることが多く、地域学習に興味関心が湧きにくい側面を持っている。そこで、この2つの実践は共に、地域の概要を直接的に教えるのではなく、地域にある「食」や「交通」に焦点をあて、そこから



児童たち自身が、調査や探求を通して地域に気づいていく学びの方向性を打ち出し、児童たちの興味関心を見事に引きつけているのがわかる。そして、児童たちが地域を好きになり、想いを深めている事から、授業としての完成度は非常に高いといえる。教師側の授業づくりの技術・能力は、「社会に開かれた教育課程」創造に向けて、何をおいても重要であると言えるだろう。それ故、当該校において教師の授業力の向上を図るべくなされた、授業研究を中核とした校内研究の改革というカリキュラム・マネジメントは、大きな影響を与えていると言えるのではないだろうか。

さらに、この実践においては、小学生である児童たちが自分自身で探求すると言っても、当然限界がすぐに来てしまう。その絶妙なタイミングで地域との連携を多様に組み合わせ、児童たちの真剣な学びを継続させ、高まらせている点が重要である。もし仮に調査活動をインターネット等で調べるだけであつたら、本実践のような真剣な児童たちの追求も生じなかつたであろう。切実性を背景にした「連携」が生み出されたため、授業は飛躍的に発展していったと言っても過言ではないだろう。そして、なにより、連携する際に「互酬性」の視点<sup>1)</sup>を教師側がしっかりと持っていることが、連携の深さや広がり大きく影響している。時として教師側が想定しなかつた「互酬性」も確立したようだが、最初から構想に織り込まれていたことによる成果であると言えるだろう。

地域との連携により、授業づくりを通して教師や児童たちへのメリットは計り知れないものがあったが、連携先はどうであろうか。実際に顧客が増えて増益につながったケースは別にしても、連携で生まれた教え・学ぶ事の素晴らし

さへの気づきを大人が感じ、今後も継続して触れていきたいという傾向が、保護者や連携に携わった方々からの感想から読み取ることができる。

もちろん、前述のようにこの実践が2人の教師の努力だけで立ち上がったのではなく、この実践を可能とする学校システムや学校文化形成のためのカリキュラム・マネジメントが効果的に機能したことも忘れてはならないだろう。

この実践をもとに、同校の同僚たちが、様々な「互酬性」に配慮した切実性のある連携を組み込んだ授業づくりを積み上げ、それをサポートする校内研究や校内運営等の充実を図るカリキュラム・マネジメントが継続的・効果的になされることにより、児童たちにとって本当に意味のある「社会に開かれた教育課程」が生み出されると考える。そしてそれは浅谷教諭の感想に示されたように、児童の学びの満足感・達成感のためであることを忘れてはならない。

これらの一連の取り組みから、効果的であり、かつ継続性のある「社会に開かれた教育課程」の創造に際しては、組織や会議を新設して紙媒体の教育課程を作成するのではなく、「互酬性」の視点を入れ込んだ地域の連携を巧みに組み入れた、地域を素材にした総合的な学習の授業づくりを可能とするカリキュラム・マネジメントを実施していく事の重要性が明らかになってきたと言えよう。各学校の学校長をはじめ、カリキュラム・マネジメントをサポートする教育行政や教育研究者の責務は、今後さらに重くなってくると考える。なぜなら「社会に開かれた教育課程」の創造とは、新しい学校を創造していくことに他ならないからである。

## 7. おわりに

「社会に開かれた教育課程」の創造は、ただ連携を促進したり、コミュニティ・スクールとして位置づけたり、新たな紙媒体の学校運営計画を作ることではない。なぜならそれでは、教育課程の真意が児童たちに届かず、組織づくりや地域イベント開催のレベルで止まってしまうからである。意義ある「連携」をもとにした、意味ある地域学習が組織され、それが積み重なることによって、意味ある「社会に開かれた教育課程」が授業という形で創造される事が、最も効果的であり、かつ現実的な今後の取り組みの方向性ではないかと考える。

最後に、本実践を具現化するにあたって連携の労を惜しまなかった、保護者の方々をはじめ、行政や事業所の方々にこころより感謝申し上げると共に、新たなカリキュラム・マネジメント構築に向けての改革に、前向きに取り組んでくれた茅ヶ崎市立浜須賀小学校の全教職員に心よりお礼申し上げるものである。

なお、本論文には申告すべき利益相反はないことを申し添える。

- 
- 1) 小学校学習指導要領。平成 29 年 3 月告示。文部科学省。P.2.
  - 2) 合田哲雄.Q&A「社会に開かれた教育課程」。教職研修 8 月号。教育開発研究所。2017-08。P.18-19.
  - 3) 無藤隆,「社会に開かれた教育課程の実現に向けて学校としてできること」,平成 28 年 12 月 18 日更新,最終閲覧日平成 29 年 11 月 11 日, <https://ja-jp.facebook.com/notes/takashi-muto/>
  - 4) 佐藤学。専門家として教師を育てる—教師教育改革のグランドデザイン—。岩波書店。2015。P.33-43.
  - 5) 栗原幸正。学習指導要領改訂に対峙するカリキュラム・マネジメント—「漠然とした不安」の払拭を

目指す学校経営システムの構築—。学校経営研究第 42 巻。大塚学校経営研究会。2017-04。P.39-47.

- 6) 現在のように教育行政による研修体制も十分確立しておらず、保護者と一体となって児童たちの育成にあたる事自体が、教師としての技術やセンスの向上につながった教師も多かった。
- 7) 小学校低学年の昔遊びや、中・高学年の福祉教育や平和教育で、当事者や体験談を聞くなどの活動が多い。学校によっては生活科導入の際にどの学校も取り組んだ人材マップを活用して運用しているケースも存在する。事前に十分な打ち合わせ等を実施し、授業としてコーディネートしないと、児童たちは体育座りで「聴く」という修行をすることになり、教育としての対時間効果は薄い。
- 8) 学年を形成する学級が、それぞれの活動をする、保護者から同様の教育をして欲しいと要望されたり、教師の資質が教育内容に反映することで明らかになることを避けるため、管理職だけでなく教師たちからも同一内容・同一歩調を求める気持ちが強い。特に世代交代が進み若手教師が増えた現在、その傾向は強くなってきている。
- 9) 同 5) P.44. 筆者はカリキュラム・マネジメントとは、学習指導要領に示された内容を的確に把握し、学校・地域・児童生徒の実情に即して、教職員がその専門性を生かして授業づくりや活動づくりに取り組める学校組織運営のための経営戦略であると捉えている。
- 10) 長沼豊編。学校ボランティア・コーディネーションボランティア・コーディネーター必携—。筒井書房。P.9-58。2009-6。長沼らはボランティア活動には「互酬性」への配慮が重要と述べる。特に学校においてボランティアを実施する際には、その関係性の構築が必須であると説く。
- 11) 「互酬性」の視点については、平成 12 年度に栗原が茅ヶ崎市浜之郷小学校に教員として在籍していた際、総合警備保障 (ALSOK) と協働して「あんしん教室」の立ち上げに関わった経験が影響している。その際、学校側は安全を守る仕事の「授業づくり」を ALSOK の全面支援を得て完成させ、ALSOK 側は学校側から児童に教える方法を学び社会貢献事業の立ち上げと社員研修方法の刷新に成功している。その時の経験について、浅谷・大國両教諭をはじめ同校の教職員に栗原が校内研修を通して伝えている。